

三好徹

白昼の迷路

文春文庫





文春文庫

白昼の迷路

定価はカバーに
表示してあります

1991年3月10日 第1刷

著者 三好 徹

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁・乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-712112-3

文 春 文 庫

白 昼 の 迷 路

三 好 徹

文 藝 春 秋

白昼の迷路・目次

陰の主役／7

魔の谷／37

霧の壁／66

株主総会／96

闇の声／126

標的／154

消える／182

密約／213

司法取引／241

舞台裏／270

黒幕／300

内部の敵／333

見えぬ壁／364

秘密協定／396

白昼の迷路

陰の主役

1

立見史郎^{たちみ}は自分のからだをすばやく流し終えると、引退したレスラーのようなからだつきの山岡の背後にまわりこんだ。

「先生、お流しいたしましょう」

「すまん」

山岡はおうようにいってから、でつぷりと肉のついた背中をしゃんと伸ばした。両腕は肘^{ひじ}のあたりから先が陽やけして褐色になっている。おそらく連日のようにゴルフをしているに違いない。

立見はタオルにたっぷり石鹼をこすりつけてから、山岡の背中を洗いはじめた。こんな光景は、妻子がいたらとても見せられるものではないな、と思った。日成電産の総務部次長がどうしてゴルフ場の浴場で総会屋の背中を流さなければならぬのか。資本金千四百億円、売上高約二兆円、従業員約八万名という大会社の総務部次長といえ、世間的には羨^{うらやま}しがられるポ

ストだった。だが、年に一回、株主総会の前になると、立見ら総会担当の社員たちは、いじけた思いをかみしめざるをえないのである。総会を無事に終了させるためには、山岡らの力がかかるしかないのだ。山岡は総研グループと呼ばれる集団のリーダー格で、年齢は立見と同じくらいである。

「立見さん、あんた、まだ独身だってね」

と山岡がいった。

「ええ、そうなんです」

「どうしてなんだい？」

「どうしてといわれましても返事に困ります。何となくもらいそびれてしまったというか、嫁さんにきてくれる人がいなかったというか……」

「そりゃ、ないだろ。日成のエリート社員に嫁さんの来手がなかったなんてありえんことだ」

「でも、事実なんですから」

「何なら世話しようか」

と山岡がからかうようにいった。

本心からの言葉ではないとわかっていても、うかつに返事はできなかった。よろしく願いますよ、などと調子を合わせて、本当に縁談をもちこまれたら厄介である。

「それがこの年になりますと、結婚なんて面倒で、独りの方が気楽なような気がしますね」

「あんた、失礼だが、いくつになる？」

「三十九歳です」

「ほう、出世は早いな。だったら奥さんのいた方がいいだろう。それに面倒がる年でもないじゃないか」

山岡の言葉はなおも執拗^{しつと}だった。立見としては、あくまでも柳に風と受け流すしかない。

「いや、したことがないのでわかりませんが、やはり面倒のような気がしますね」

「周囲を見てみると、そう感ずるのかね？」

この言葉にも、うかつに、そうですとはいえなかった。ともかく当たり障^{さわ}りのない答えをしなければならぬ。山岡らを相手にするのは、神経が疲れるのだ。

「周囲とは関係がないんですよ。子供にみやげを買って帰る姿なんか見ていますと、いいなど思うこともあるんですがね」

「あんだ、なかなか用心深いな」

と山岡が立見の胸の内を見すかしたようにいった。

「は？」

立見は心の中で、辛抱するんだ、といい聞かせた。泣く子と地頭には勝てない、というのが、総会担当者は総会屋には勝てないのである。

「ま、いいがね。おたくの社風というのかな、トップもそうだけれど、みなさん、大体において、逃げが上手だ。わたしのよく知っている政界の実力者がいつておったがね、日成さんは取るものは取って、出すものは出さない。本当に逃げるのがうまい、というんだよ」

立見は黙々と山岡の広い背中を流した。いいたいだけ相手にいわせるしかない状況だった。「なんとかというコンピュータの開発で、七百億円も政府の助成金をもらっているくせに、い

ざというときには知らん顔をする、といって、怒っておったよ」

と山岡はいった。

立見は、それが四年前のN二〇〇型のことをいっているのだ、とすぐにわかった。ただし、七百億円の助成金は日成電産一社でもらったわけではなかった。ナコム社との共同開発だったのだ。

「やらずぶったくりとはこのことだといって、その先生はお冠かんむりだった」

政治献金のことをいっているのだとはわかるが、山岡のいう実力者が誰のことか、立見には見当がつかなかった。もしかすると、自分は政界の実力者にもコネを持っているぞ、と山岡が誇示するために、そういうことをいっているのかもしれないのだ。

「先生、そういうお話になりますと、わたしなどにはまるで雲をつかむようなものでして……」

「しかし、きみのところのコンピュータは、国立大学だの鉄道だの、国家機関への納入が多
いんじゃないのか」

「多いといいますが、うちは国内市場の占有率は十五パーセント程度でして、ナコム社さんに比べましたら、まだまだ問題になりません」

「ナコム社はどれくらいかね？」

「二十四、五パーセントは行っておりますでしょう。うちも何とか負けないように努力はしているのですが……」

立見は、山岡の背中を流し終え、どうも失礼しました、といって引き退さがった。

「やア、ありがとう」

山岡は立ち上って、浴槽に入った。立見は、自分のからだに飛び散った石鹸の泡を落してから、やはり浴槽に身を沈めた。どうせ、きょう一日は、何をいわれても頭を下げる覚悟できているのである。

日成電産のコンピューター部門の売上げは、全体の一割強であり、コンピューターが主力のナコム社とは、比べること自体がおかしいのだ。しかし、それを山岡にいったところで、はじまらない。立見の立場からいえば、山岡に機嫌よく一日を過してもらうことが大事であった。こういう苦労は、ほかの部署の社員には決して理解してもらえないだろう、と立見は思った。いや、ほかの部署どころか、トップにもわかってもらえるかどうか。

社長の駒田は、技術畑の出だった。日成は創業以来「技術の日成」というイメージで売っている会社である。むろん、技術を売りものにするメーカーは、なにも日成電産だけではなかった。だが、他社との違いは、社長には必ず技術畑の出身者が就任するという伝統をもっていることだった。

事務畑出身の最高ポストは、副社長であった。副社長は二人いる。株主総会の対策は、そのうちの一人の森井の担当だったが、総会において議長をつとめるのは社長と決っており、駒田がすべてをさばかなければならない。しかし、技術畑一本槍だった駒田は、総会を乗り切るテクニクが未熟である。また熟達しようという気もない。それだけに、総務部の事前工作が不可欠だった。最大限三十分以内には総会を終了させなければならず、そのためには山岡らの手をかりるしかないのであった。立見にしてみれば、少々皮肉をいわれようが、あるいは背中を

流すという奉仕をしようが、そんなことですめば、お安い御用であつた。もちろん、それ以外にかなりの額の対策費が山岡らのグループに渡されるのだが。

2

立見は浴場を出ると、ロビイの片隅にある売店へ行き、おみやげ用の海産物の籠かごを二箱ほど買い求めた。

この日、ゴルフに招待したのは、山岡と秘書の児島律子だつた。両者の関係がそれ以上のものであることは、周知のことだつた。立見は、はじめ山岡の片腕かたでんといわれる金本を加えるつもりだつたのだが、山岡の方から、

「あいつは上手すぎるから、とてもいっしょにはやれないよ。また別の機会にしてくれ」といつてきた。金本のゴルフが桁けた違いであることは確かだつたが、それよりも律子と二人だけになりたかつたのであろう。

海産物の籠は二人分で四千円だつた。

前日、立見は部長の町田から、帰りに持たせるみやげについて、何を用意してあるか、と聞かれた。立見がクラブハウスの売店で売っている土地の名産を考えていると答えると、町田は、

「そんなものを持たせたら、何をいわれるかわからんよ。つむじを曲げられたら厄介だ。こちらでちゃんとしたものを用意して行きたまえ」

といった。

「いや、大丈夫です」

「きみ。ほかの社は高価なものを出している、と聞いているぞ。あのへんのゴルフ場では、土地の名産といったって、魚の干物くらいしかない」

「お任せ下さい」

と立見はいった。じっさい、自信はあったのだ。

前に、他社の総会担当者から次のようなエピソードを聞いたことがある。その担当者は、総会对策について認識不足の新任上司に予算を削られてしまった。困りはてた末に彼が思いついたのは、山岡がときどき子供の話をすることだった。株主総会において攻撃側に回ったときの山岡の迫力には定評があったが、そういう、いわばこわい顔とは別の一面もあるらしい。そこで、苦肉の策で子供の玩具を買い、弁解しやすい渡したところ、山岡はひどく喜んだというのである。

立見は、籠を手にとって、食堂へ行った。

山岡は律子とビールを飲んでた。

「まことにつまらん物ですが」

立見は籠を椅子のわきに置いた。

「ほう鰺あじの干物か」

山岡の声は上機嫌だった。立見はほっとしながらも、

「こんな物しかありませんで、申訳ございません」

と頭を下げた。

「いやいや」

山岡はおうようにうなずいてから、立見のグラスにビールを注いだ。

「これはどうも恐れ入ります」

立見はあくまでも丁寧にいった。総会が無事にすむまでは道化役に徹しなければならなかった。

その日のプレイについて会話がかわされたあと、山岡がふと思ひ出したようにいった。

「そうそう、来月下旬、アメリカへ行かねばならんことになった」

なにげなく口に出しているが、前もって計算していたことは明らかだった。アメリカ旅行について何か立見に依頼したいことがあるのであろう。

「バカンスでいらっしゃる？」

「いや、仕事だよ」

山岡はいやにきっぱりといった。

立見は、山岡のような総会屋がアメリカに何の用があるのだろう、と疑問に思った。

「お仕事ですか」

「うむ。じつは、うちのグループの何人かがこんどアメリカン・ビジネス・マシンの株主になったんでな、その株主総会へ出席することになった」

山岡はそういつて立見を見た。

立見はすぐには答えられなかった。アメリカン・ビジネス・マシンはABMの略称で知られている世界最大のコンピュータ・メーカーである。西欧世界における市場占有率は七十五

パーセントと圧倒的だった。何しろ百三十カ国に支社ないしは形式的には独立資本の会社を傘下に有しており、従業員の総数は、全世界で約三十五万人といわれていた。

日本にも本社と研究所があり、国内の市場占有率は第二位である。一位のナコム社に、前年度の売上げで約二百億円ほど遅れをとっているが、十年前までは、ナコムと日成とが束になつてもかなわなかったのだ。

「は、はア……」

立見は意味のない^{つぎや}呟きをもらすばかりだった。

「どうしたかね？」

山岡は葉巻を口にくわえた。律子がマツチをすった。

「いや、どうも……大したものだと思います」

ほかにいいようもなかった。

「感心されるほどのことじゃないが、ただ、ちょっと問題がある」

「とおっしゃいますと？」

「あちらの株主総会がどう進められるかについては、すでに調査済みなんだが、うちのグループには英語でスピーチのできるやつが一人もおらんのだ。せっかくアメリカまで出向いても、発言できなければ意味がない。日成さんは、あちらに支社なり、現地資本の会社があると思うが、英語のうまい人を世話してもらえんじやろうか」

難題だった。

山岡のいうように、米国にはアメリカ日成があり、資本的には別会社であるが、事実上は支